

ムーンショット型研究開発制度 目標8 プロジェクト
「2050年までに、激甚化しつつある台風や豪雨を制御し
極端風水害の脅威から解放された安全安心な社会を実現」

「海上豪雨生成で実現する集中豪雨被害から解放される未来」プロジェクト 実証実験「人工降雪に係る予備実験」報告会

主催：「海上豪雨生成で実現する集中豪雨被害から解放される未来」プロジェクト
後援：富山県、千葉大学、富山大学、富山県立大学
共催：株式会社たがやす
進行：株式会社たがやす

オープニング・ご挨拶

1. オープニング・ご挨拶
2. 実験の概要説明
3. 実験状況と報告
4. 今後の方向性・富山でおこす共創
5. 質疑応答と意見交換
6. 閉会のご挨拶

開催者・研究チームの紹介

プロジェクトマネージャー

千葉大学 教授
環境リモートセンシング
研究センター

小槻 峻司

プロジェクト責任者

富山大学 教授
地球システム科学科

安永 数明

プロジェクトメンバー

千葉大学 特任研究員
環境リモートセンシング
研究センター

大橋 正尚

プロジェクトメンバー

富山大学 准教授
都市デザイン学部

濱田 篤

プロジェクトメンバー

富山県立大学 講師
工学部

吉見 和紘

プロジェクトアドバイザー

科学技術振興機構 (JST)
技術主幹

高玉 孝平

説明会運営事務局

株式会社たがやす

鈴木 耕平

- 本日まで参加の皆様と実験結果（安全かつ環境に影響がないこと）を共有すること
- 実験の報告を実施、気になる点を確認、皆様が安心できるように対話をおこなうこと
- 今後の取り組みや地域の皆様との共創に関してご共有させていただき、ご意見を伺うこと

過ごし方のお誘い

「2050年までに、激甚化しつつある台風や豪雨を制御し
極端風水害の脅威から解放された安全安心な社会を実現」



Graphic by Sayo Demura

© AMAGOI Project

実験の概要説明

千葉大学 教授
環境リモートセンシング
研究センター

小槻 峻司 氏

ムーンショット目標8

「2050年までに、激甚化しつつある台風や豪雨を制御し
極端風水害の脅威から解放された安全安心な社会を実現」

小槻プロジェクト（AMAGOIプロジェクト）

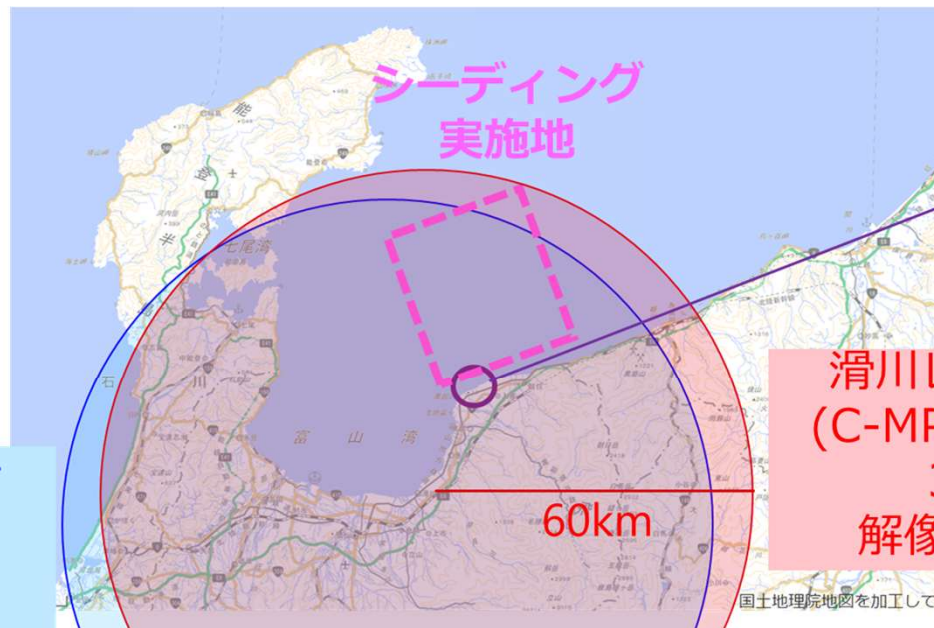
R7年度冬季日本海 シーディング予備実験・報告会

令和8年3月2日

プロジェクトマネージャー 小槻 峻司（千葉大学・教授）

シーディング実験の概要

- 2026年1月上旬に富山湾上空において、雪雲をターゲットとした、航空機からのシーディング実験（ドライアイスの散布実験）を実施
- 2025年度は2026年度以降の予備実験としての位置づけ（ロジ確立など）

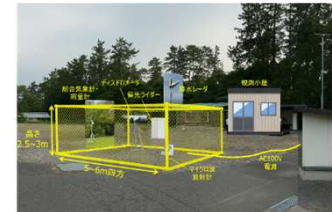


水橋レーダー
(X-MP)
5分
解像度: 高

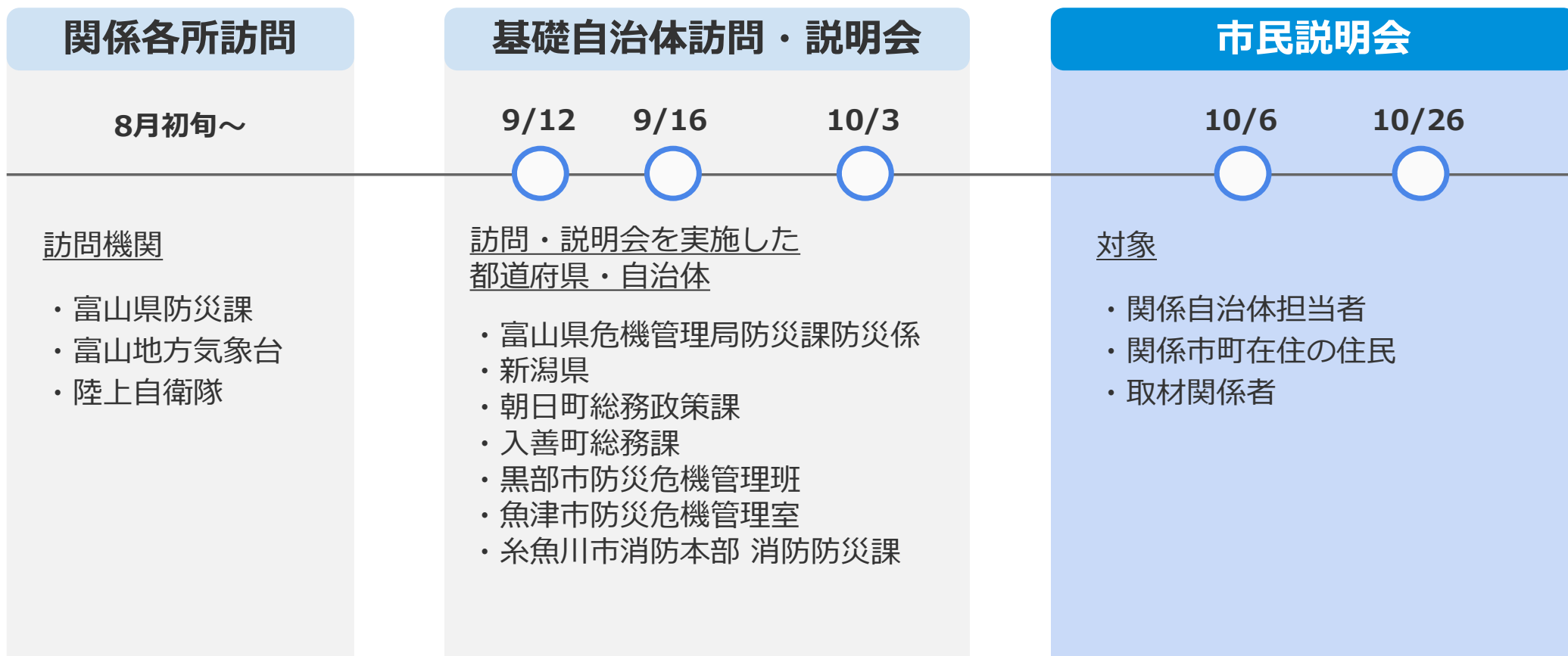
地上観測

滑川レーダー
(C-MP-PAWR)
30s
解像度: 粗

国土地理院地図を加工して作成



市民説明会：開催までの流れ (2025年)



関係各所訪問・連絡調整

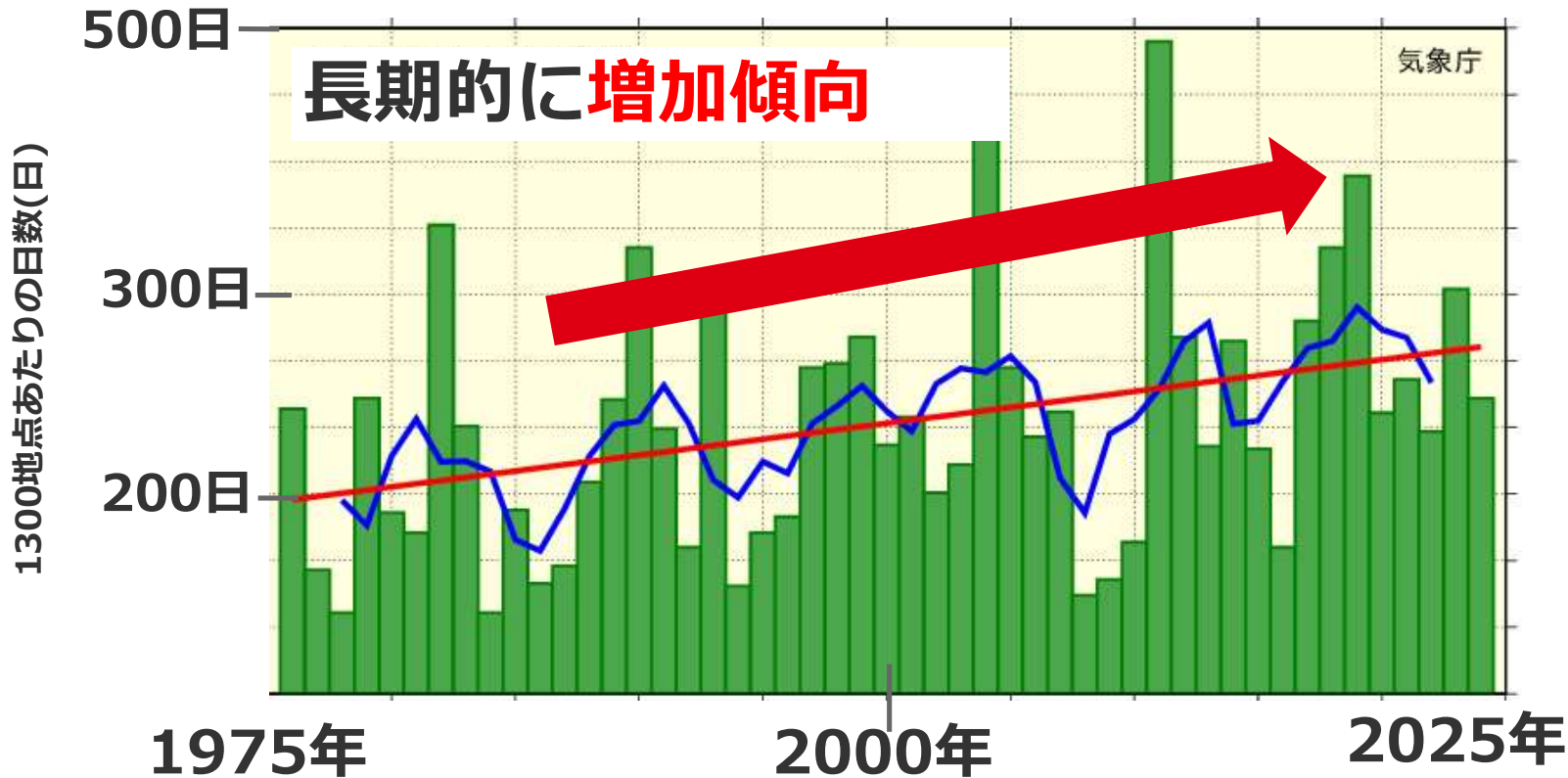
説明会開催準備 (会場手配/広報/説明会内容検討/資料作成)

- どのようなプロジェクトか
- シーディングの目的
- 今回の予備実験とその目的

どのようなプロジェクトか

背景: 気候変動による大雨の増加

1日の降水量が200ミリ以上の大雨を観測した日数



「大雨や猛暑日など（極端現象）のこれまでの変化」（気象庁）
https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/extreme/extreme_p.html?select_elem=amddayより加工して作成

気象制御に向けた研究の立ち上げ (2022年~)

ムーンショット

目標 8

2050年までに、激甚化しつつある台風や豪雨を制御し極端風水害の脅威から解放された安全安心な社会を実現



三好建正(理化学研究所)

台風制御プロジェクト



澤田 洋平 (東京大学)

社会的意思決定を支援する気象
- 社会結合系の制御理論



筆保 弘徳 (横浜国立大学)

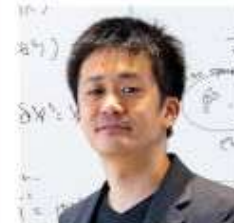
安全で豊かな社会を目指す
台風制御研究

豪雨制御プロジェクト



山口 弘誠 (京都大学)

ゲリラ豪雨・線状対流系豪雨と
共に生きる気象制御



小槻 峻司 (千葉大学)

海上豪雨生成で実現する集中豪雨
被害から解放される未来

気象制御に向けた研究の立ち上げ

ムーンショット

目標8

2050年までに、激甚化しつつある台風や豪雨を制御し極端風水害の脅威から解放された安全安心な社会を実現



三好建正(理化学研究所)

台風制御プロジェクト



澤田 洋平 (東京大学)

社会的意思決定を支援する気象
- 社会結合系の制御理論



筆保 弘徳 (横浜国立大学)

安全で豊かな社会を目指す
台風制御研究

豪雨制御プロジェクト



山口 弘誠 (京都大学)

ゲリラ豪雨・線状対流系豪雨と
共に生きる気象制御



小槻 峻司 (千葉大学)

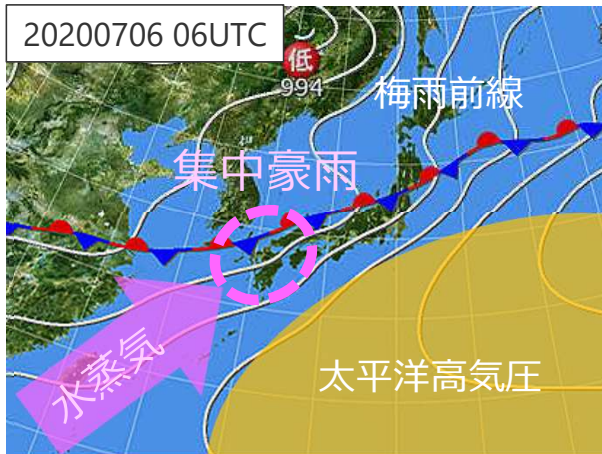
海上豪雨生成で実現する集中豪雨
被害から解放される未来

想定する集中豪雨 と 制御戦略

海上からの水蒸気供給が起こす豪雨が増加。
上流の海上で豪雨を起こし、大気中の水蒸気を大幅に減らし、豪雨被害を緩和する戦略。

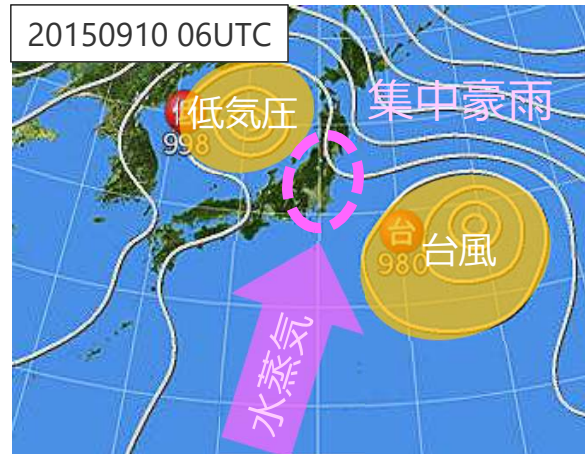
海上からの水蒸気供給に起因する集中豪雨の例

令和2年7月豪雨 (被害5,800億円)



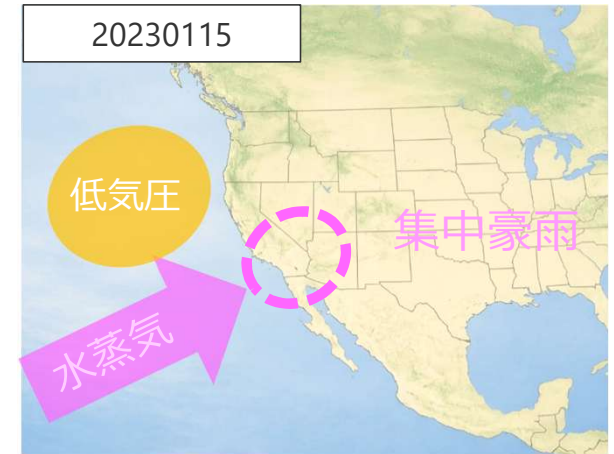
出典：tenki.jp
実況天気図(2020年7月6日)
<https://tenki.jp/past/2020/07/06/chart/>を加工して作成 (無断転載禁止)

平成27年関東・東北豪雨(被害2,940億円)



出典：tenki.jp
実況天気図(2015年9月10日)
<https://tenki.jp/past/2015/09/10/chart/>を加工して作成 (無断転載禁止)

2023年米国カリフォルニア豪雨(被害4兆円)



イメージ図

シーディング実験の目的

豪雨緩和研究におけるシーディングの位置づけ

■ 検討中の「豪雨による災害」を抑制する手法

- ① 海上で（事前に）降水を生成することで水蒸気を消費する
- ② 陸上で発達しそうな積乱雲の降水域を広範囲に拡げる

① シーディング

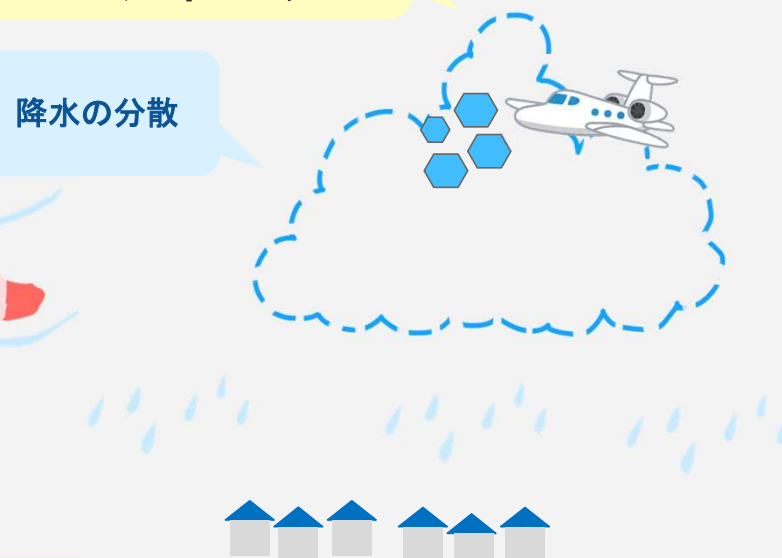
豪雨の位置を海上に移動



海域

② オーバーシーディング

降水の分散



陸地

シーディング実験の想定シナリオ

	FY2025	FY2026	FY2027	FY2028	FY2029	FY2030	FY2031	FY2032 ~
(1) 冬・シーディング (日本海)	ロジ確立と 予備実験	降水強化を 実証	オーバーシ ーディング を実証	降水強化/抑 制を実証	スピノフ を検討			
(2) 夏・シーディング (沖縄・九州・四国?)			フィールド準備 (レーダー、MWR, etc)		ロジ確立と 予備実験	オーバーシ ーディング を実証	降水強化 抑制の実現	リアルタイ ム制御
(3) 夏・洋上ドーム (沖縄・九州・四国?)							ミニチュア を開発し 風を計測	降水抑制を 実証

5年

8年

10年



今回の予備実験とその目的

今回の予備実験について

対象	冬季の富山湾で発達する雪雲
実施時期	2026年1月6日～14日のうちの4日程度
1回の散布量	(20-30kg程度の) ドライアイス散布
1回の散布時間	最長2時間程度

(従来と同程度か、それよりも小さな規模での)
本格的な取り組みに向けた予備的なステップ

2025年度の実験の目的

今年度の実験は「予備実験」という扱いであり、ロジスティックの確立が主目的

- ロジスティックの確立
 - 航空機
 - シーディング実施機器の準備・手配
 - 地上観測
 - レーダー・ライダーなどの地上観測の手配とリアルタイム運用
 - 衛星・リモセンデータに基づいたシーダビリティ予測
 - オペレーション
 - 航空機班・地上班の連携による狙った雲へのドライアイス散布
 - 実験実施基準や判定手順の確立
 - 伝達機関 (県・市町村・気象台など) への連絡手段の確立
- 科学面
 - 数値モデルのシーダビリティ (特に過冷却水) 評価と改善
 - ドライアイス落下のパラメタリゼーション精緻化
- 社会面
 - 市民説明会を含め、社会からの懸念を踏まえつつ計画・実験を進めていく

- 実験の概要説明
- 実験状況と報告
- 今後の方向性・富山でおこす共創

実験状況と報告

富山大学 准教授
都市デザイン学部

濱田 篤 氏

富山県立大学 講師
工学部

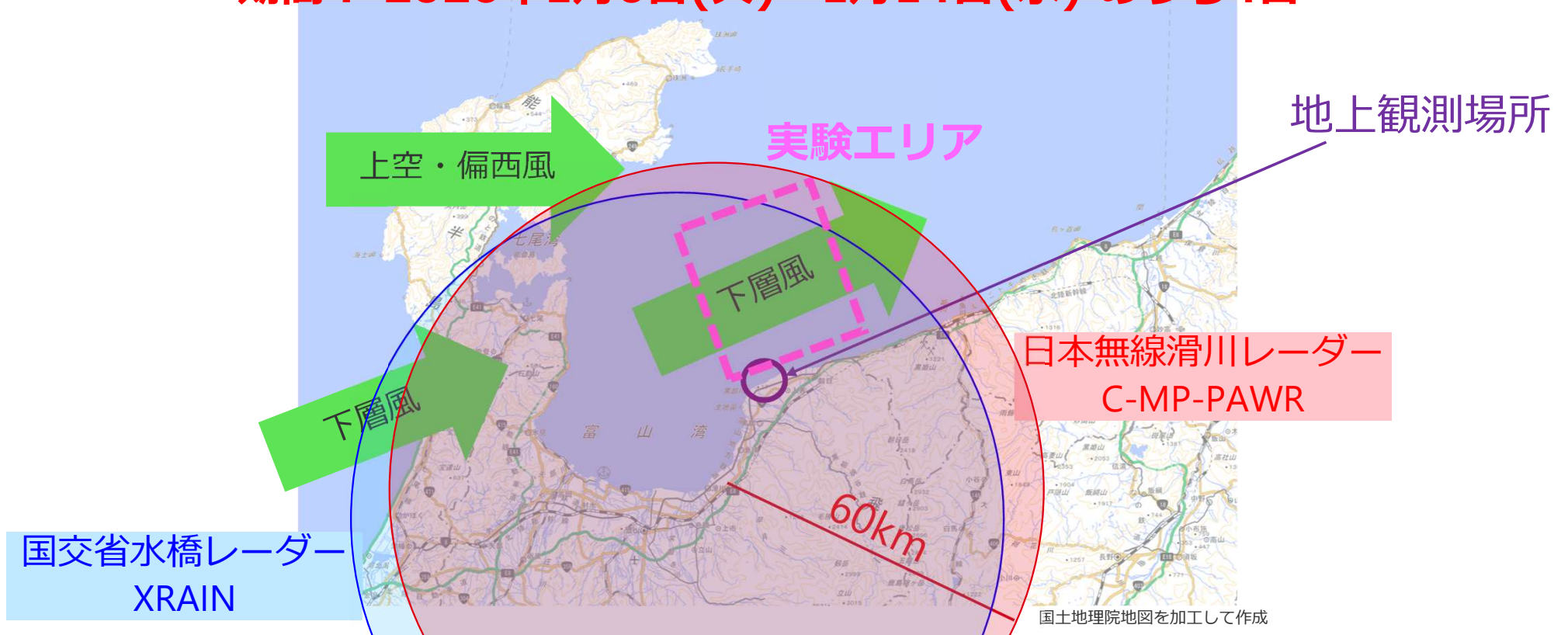
吉見 和紘 氏

実験状況と報告

1. 準備

屋外予備実験の概要

期間：2026年1月6日(火)～1月14日(水)のうち4日



- シーディング実施エリアの選定理由：
- ①雪雲が高頻度で発達する日本海の海上であること。
 - ②高頻度観測ができる滑川C-PAWRレーダーの探知範囲内であること。
 - ③地上観測が行える場所が、できるだけ近くに確保できること。

屋外予備実験の位置づけと目的

今年度の実験は「予備実験」という扱いであり、ロジの確立やルール形成が主目的

なぜ、夏ではなくて、冬の積乱雲を対象とするのか

→夏季の積乱雲に似た性質を持ちながら、予測をしやすい日本海の雪雲を対象として小規模なドライアイス散布を行い、雲の振る舞いや効率的な散布方法に関する知見を得る

	夏季	冬季 雪雲
類似性	—	高い
高度	高い ジェット機が必要 高額	低い プロペラ機で間に合う それほど高額ではない
ターゲットの積乱雲	発生予測が難しい	発生予測が比較的易しい
発生頻度	稀	頻繁に発生
観測しやすさ	しにくい	しやすい

実行判断 (Go/No-Go判断) のポイント

- Go / No Go の基準
 - 注意報・警報に基づく判断**：実施日の6～12時の富山県・東部北と新潟県・上越における大雪の「早期注意情報（警報級の可能性）」
 - 「高」（警報が確定的）の場合、実施しない。
 - 「中」以下の場合、「天気予報に基づく判断」へ。
 - 実施日の6～12時の**天気予報と時系列予報**（富山県・東部）
 - 「雨または雪」の場合、「予測データに基づく海域実験実施の判断」へ。
 - 「晴れまたは曇り」の場合、「予測データに基づく陸域実験実施の判断」へ。
 - 気象庁予測データ**に基づく実験実施の判断

海域実験実施の判断	① 前日 ブリーフィング	② 当日 ブリーフィング
MSM 700hPa の気温 (富山湾)	-10℃より低い	-12℃より低い
MSM 925hPa の風向 (富山湾)	180～270度 (西～南風)	180～270度 (西～南風)
陸域実験実施の判断	① 前日 ブリーフィング	② 当日 ブリーフィング
MSM 中層雲の雲量 (富山湾)	合計して 8割以下	合計して8割以下 かつ 下層雲量が3割以下
MSM 下層雲の雲量 (富山湾)		

実験状況と報告

2. 実験概要

実験の概要：航空機

航空機 (King Air 200T) によりドライアイスシーディングを実施。
離発着は名古屋空港 (小牧空港)から。



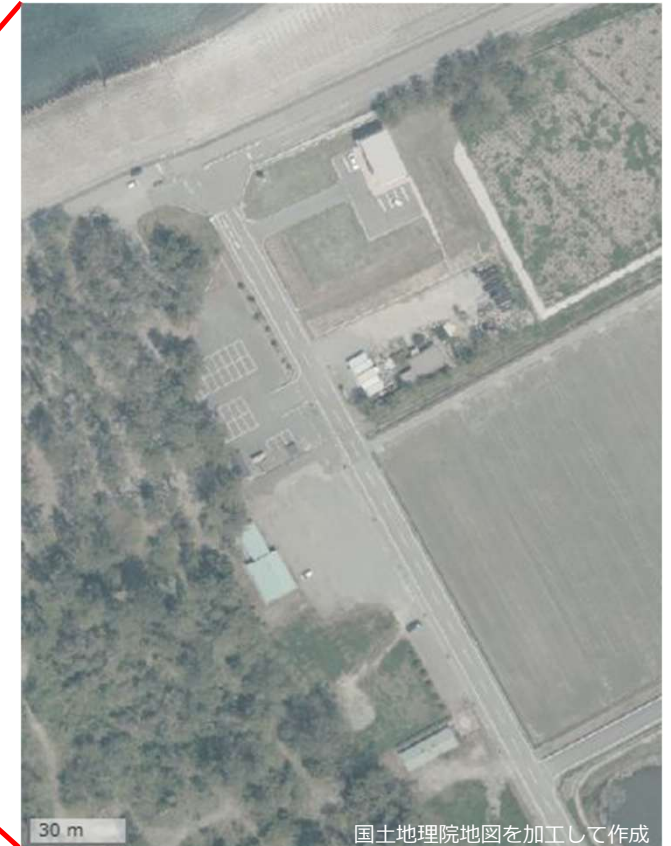
航空機



ドライアイスペレット

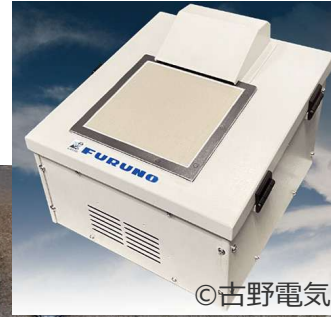
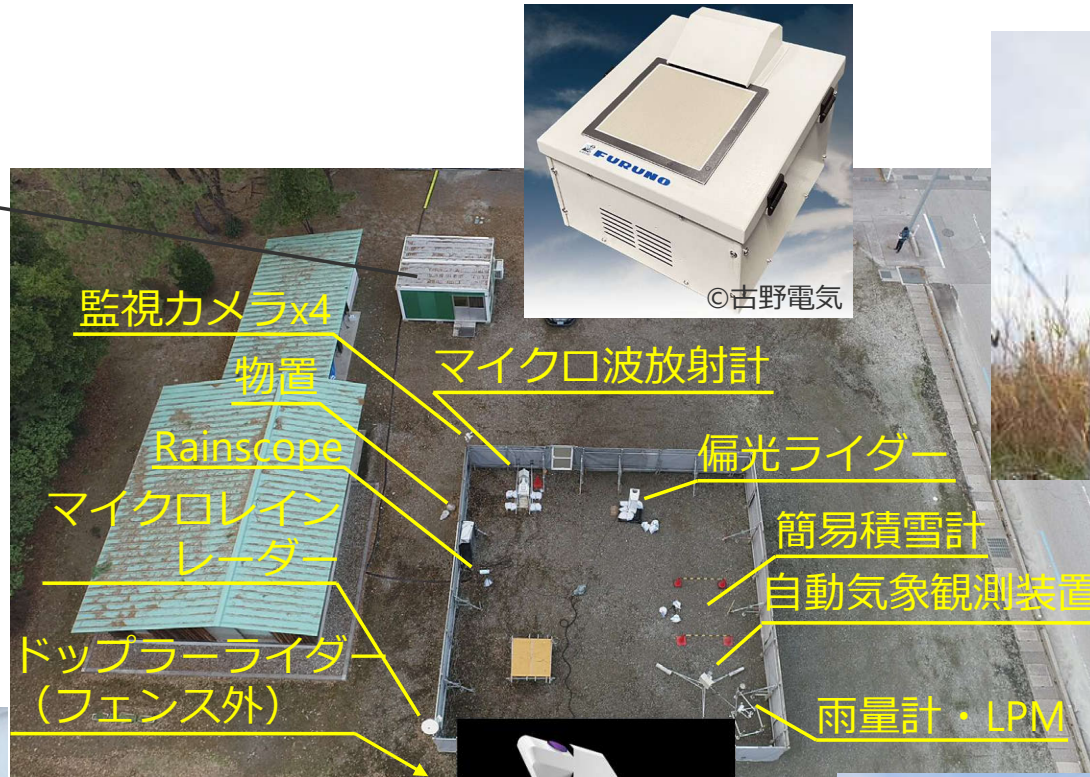
実験の概要：地上観測

- 拠点：園家山キャンプ場（富山県下新川郡入善町）
- レーダ：日本無線（JRC）Cバンドフェーズドアレイ気象レーダ
- 写真撮影班：機動観測



実験の概要：観測サイト

観測小屋



実験状況と報告

3. 結果概要

実施状況

日付	実施状況	判断理由	実施時の飛行時間
2026/01/06	実施なし	風向きが、基準に適合せず	
2026/01/07	陸上実験		3h 35min
2026/01/08	実施なし	風向きが、基準に適合せず	
2026/01/09	実施なし	風向き等は適合、気象条件により	
2026/01/10	海上実験 + 陸上実験		4h 5min
2026/01/11	実施なし	大雪警報が直前の一部の時間帯に発令、 落雷リスクが高かったため	
2026/01/12	海上実験		2h 35min
2026/01/13	海上実験		3h 45min
2026/01/14	実施なし	風向きが、基準に適合せず	

2026/01/07 陸上実験

Exp4 シーディング

(Exp4a 13:10-13:40)

(Exp4b 13:40-14:20)

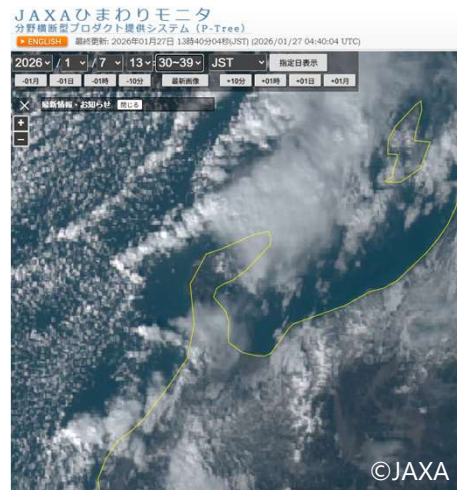
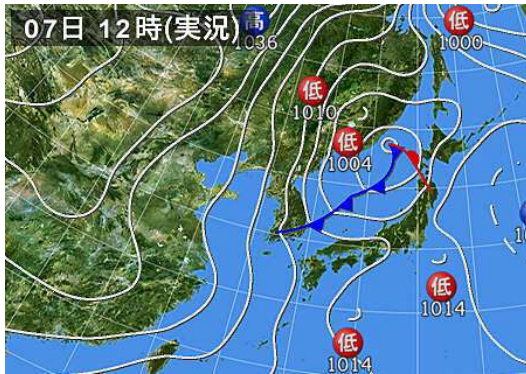
概要: 2026/01/07 陸上実験(Exp4a)

地上観測所上空に対して連続した陸域実験・シーディング

天気概況

寒冷前線通過前の入善上空で実施

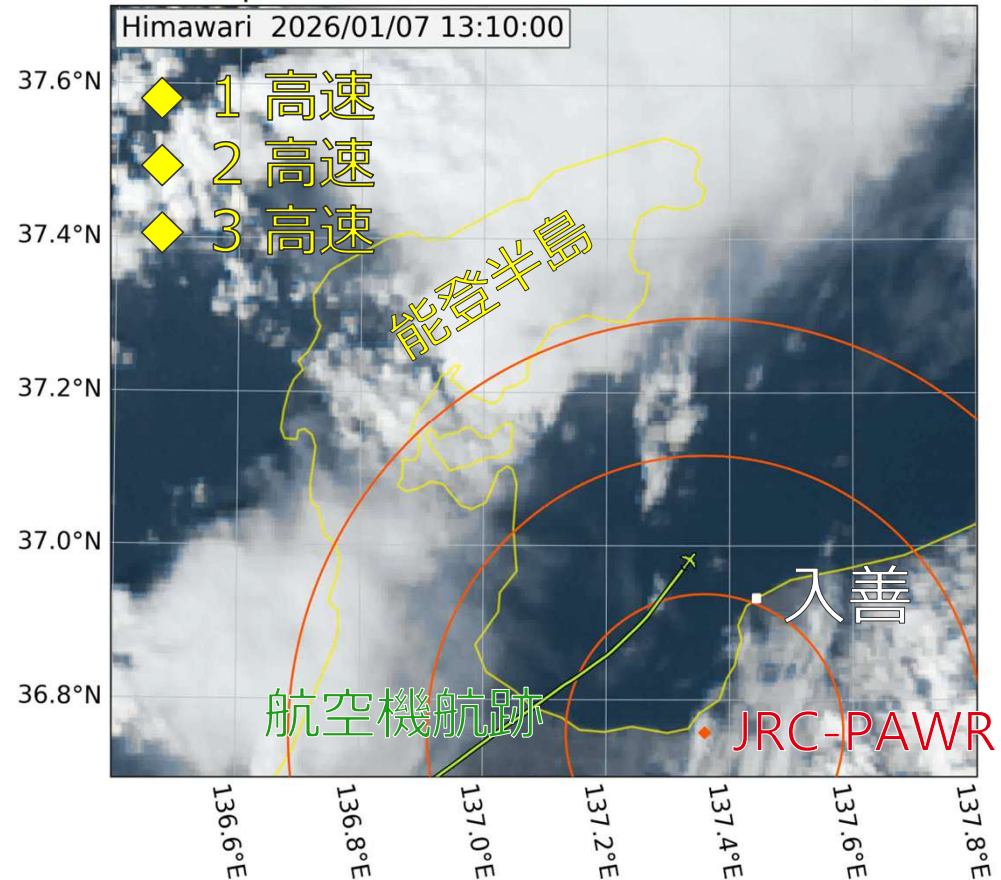
出典: tenki.jp
実況天気図(2026年1月7日)
<https://tenki.jp/past/2026/01/07/chart/>を加工して作成(無断転載禁止)



入善上空では雲の分布が少ない状態が維持されていた

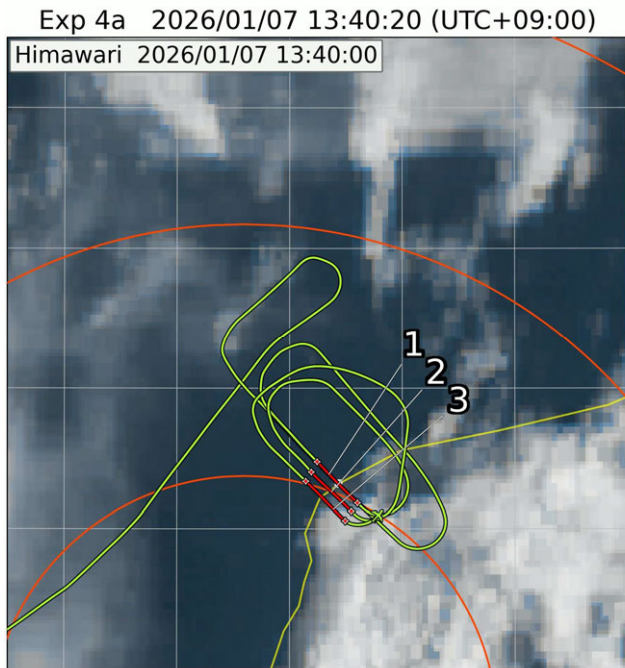
シーディングの実施状況 (補正RGB画像)

Exp 4a 2026/01/07 13:10:00 (UTC+09:00)



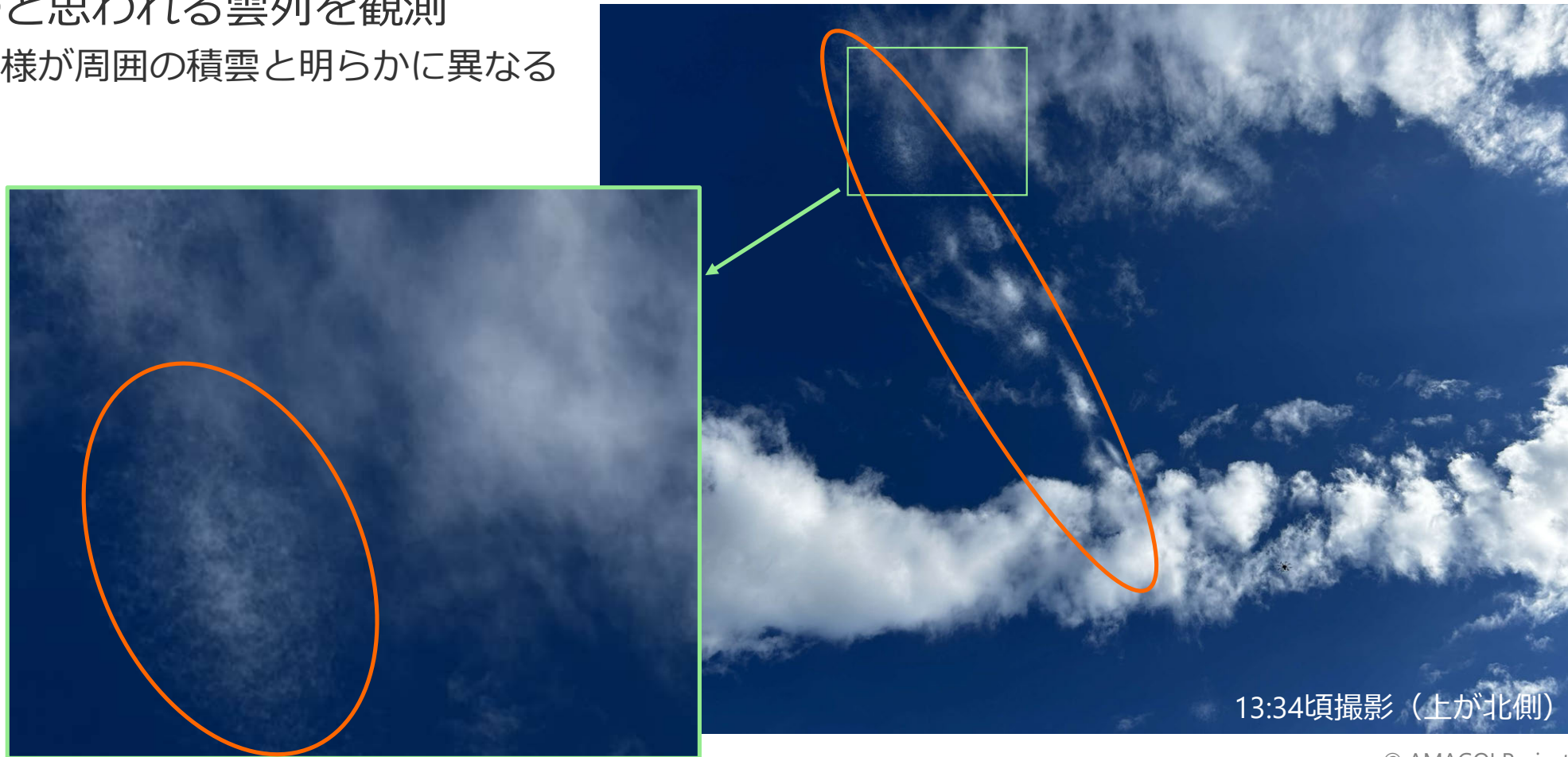
静止画像 と 航空機映像: Exp4a シーディング実施

Exp4aシーディング時間帯の上空から



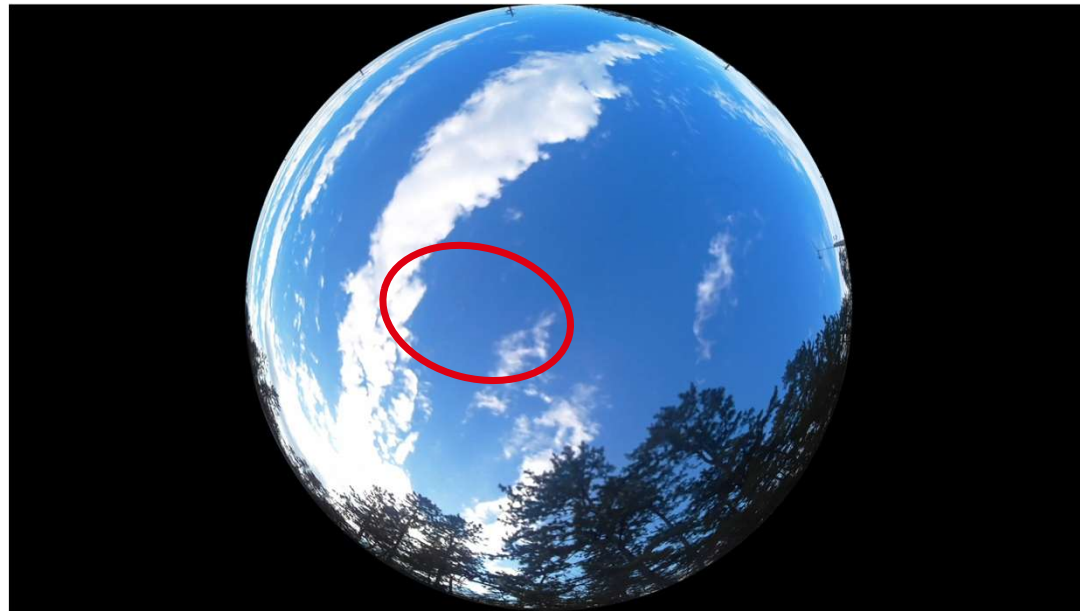
結果：2026/01/07 陸上実験

- 2026/01/07の陸上実験において、13:30過ぎにドライアイスシーディングによるものと思われる雲列を観測
 - 態様が周囲の積雲と明らかに異なる



結果：2026/01/07 陸上実験：全天カメラ

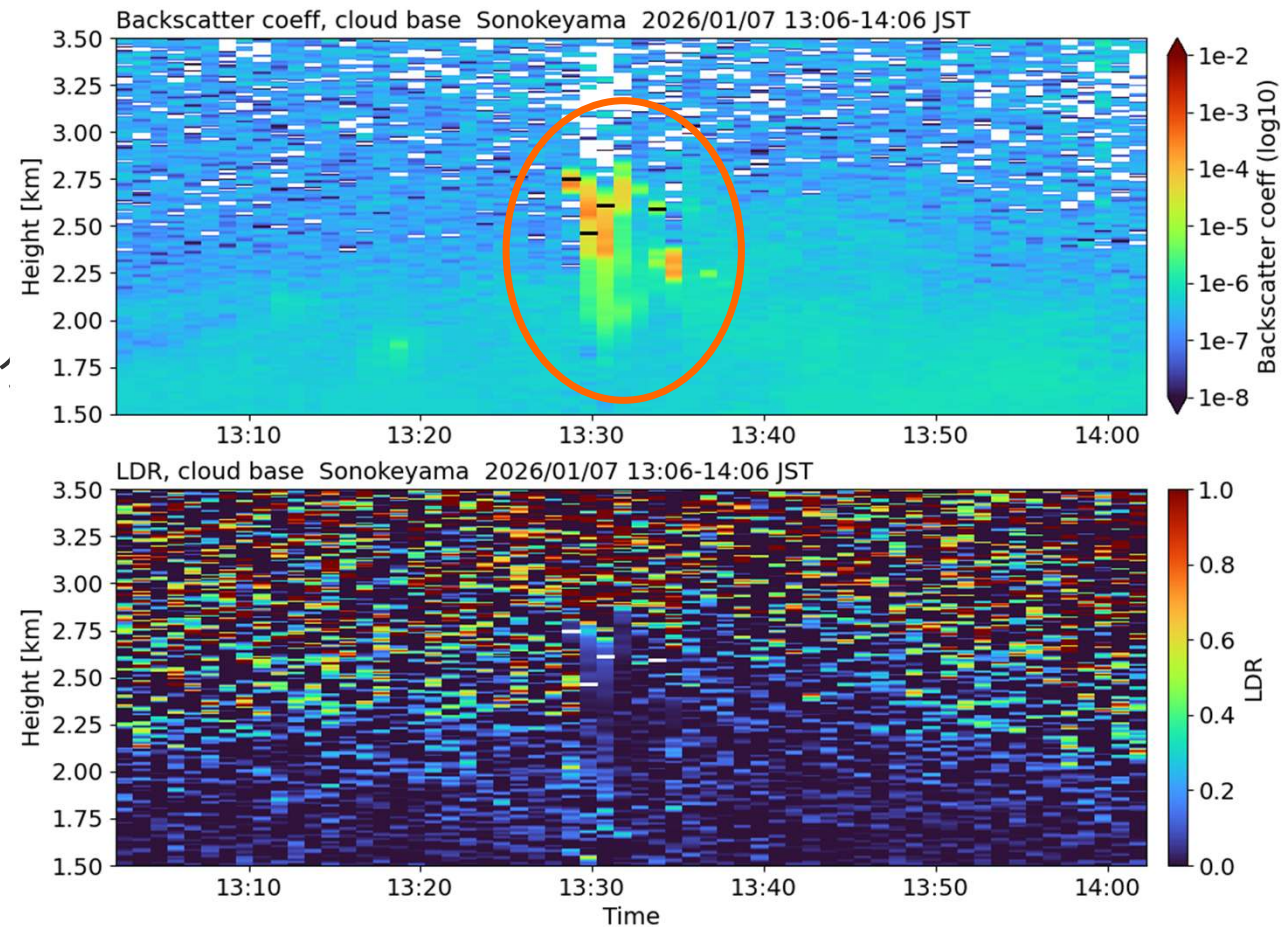
- 実験1回目（1月7日 13:34頃）に、シーディングによって発生した可能性のある筋状に連なった雲を観測



シーディング1回目の雲の様子（4倍速）

結果：2026/01/07 陸上実験：偏光ライダー

- 偏光ライダーに関連すると
思われる変化を捉えている
- ただし、同時に存在した
(自然の) 積雲である可能性も
否定できない
- マイクロレインレーダー、マイ
口波放射計、JRCLレーダーには
変化は認められなかった



2026/01/10 海上実験

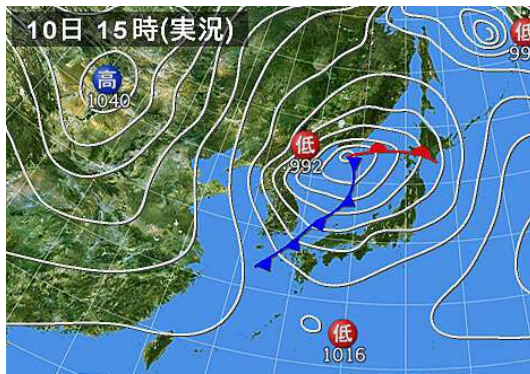
**Exp2 シーディング
(15:25-15:55)**

概要: 2026/01/10 海上実験 (Exp2)

ロール状対流で成長中の雲を選定し計8kgのドライアイスを散布

天気概況

寒冷前線の
前面で実施



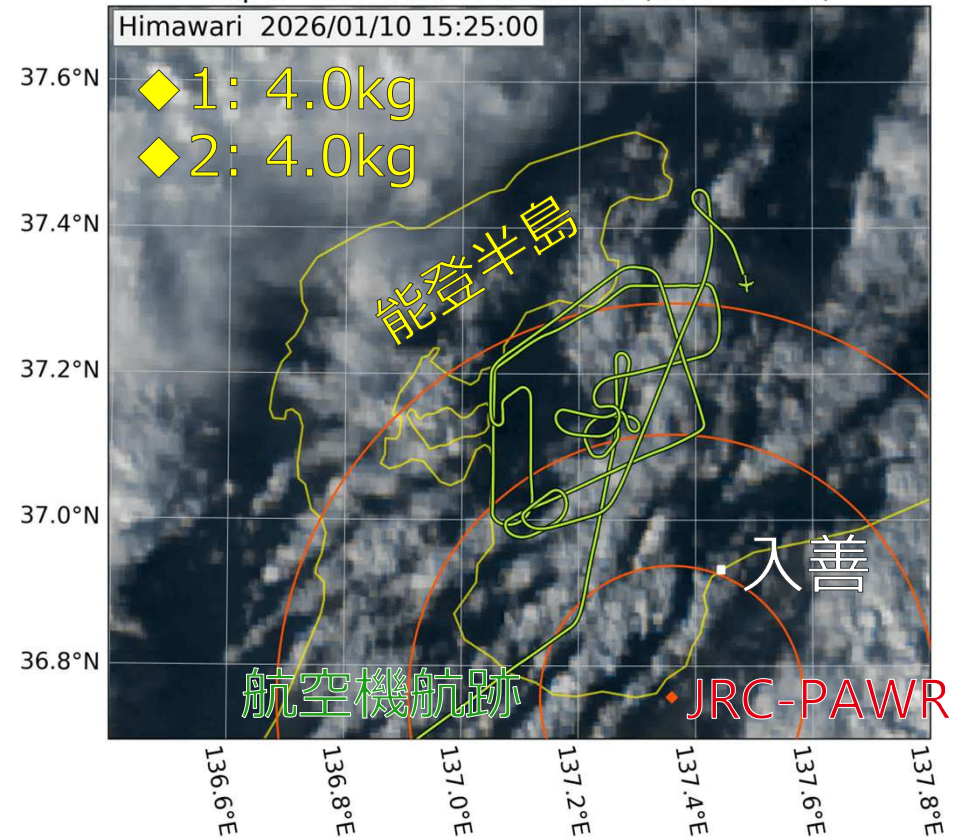
出典: tenki.jp
実況天気図(2026年1月10日)
<https://tenki.jp/past/2026/01/10/chart/>を加工して作成
(無断転載禁止)

機内から目視
で対象の雲を
選定



シーディングの実施状況 (補正RGB画像)

Exp 2 2026/01/10 15:25:00 (UTC+09:00)

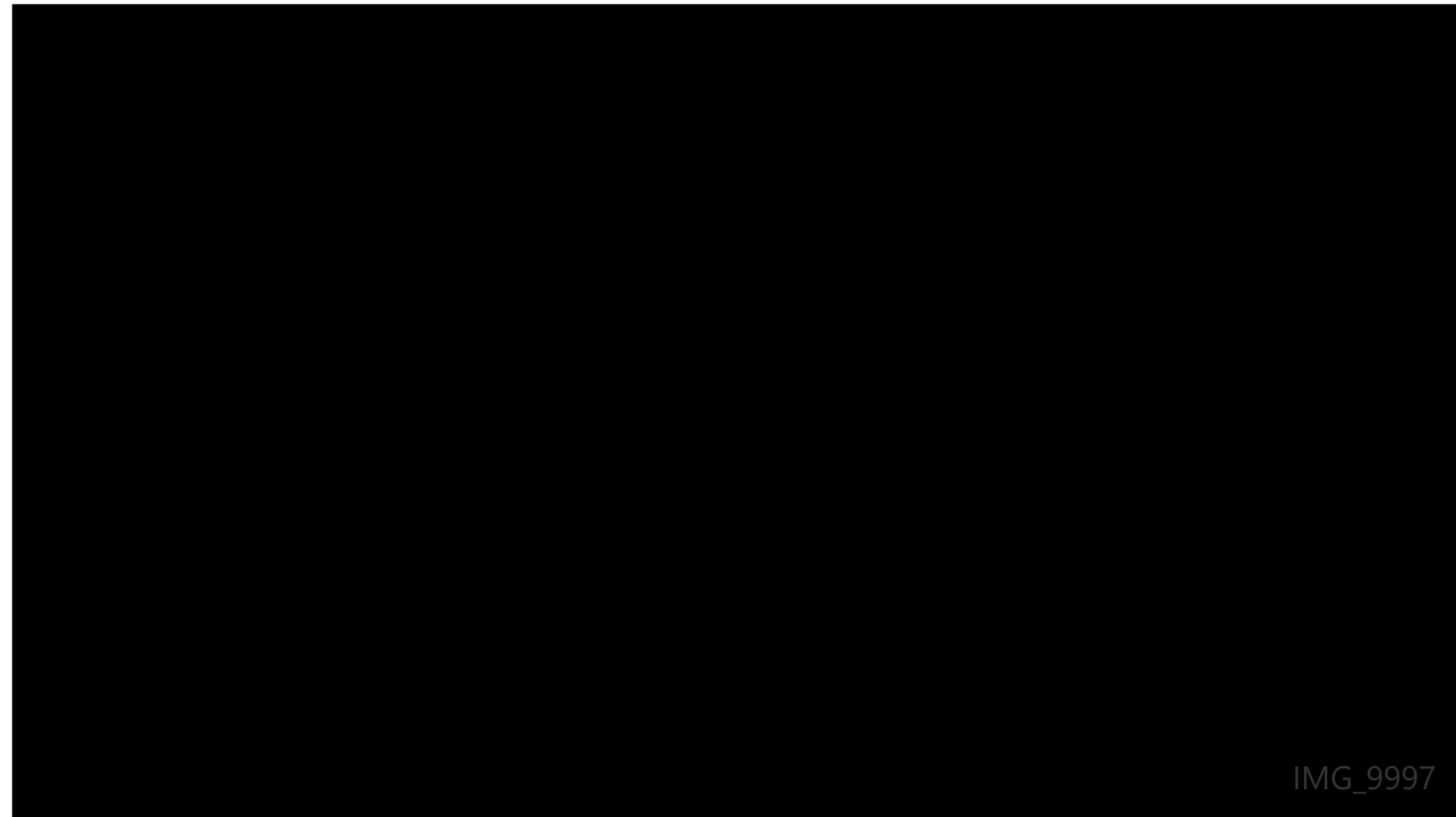
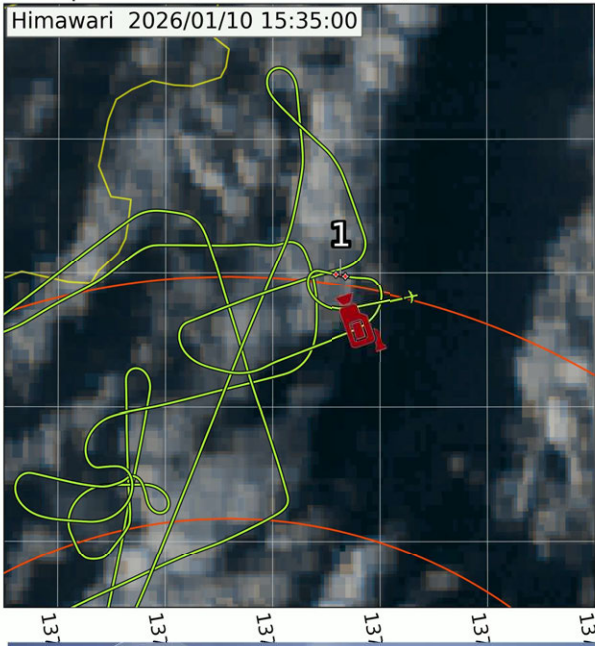


静止画像 と 航空機映像: Exp2 シーディング実施

動画

シーディング後(Exp2-1)の雲の目視による確認

Exp 2 2026/01/10 15:36:25 (UTC+09:00)

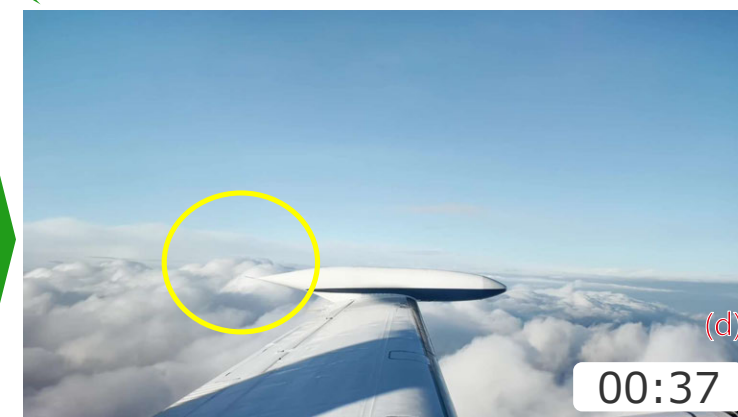
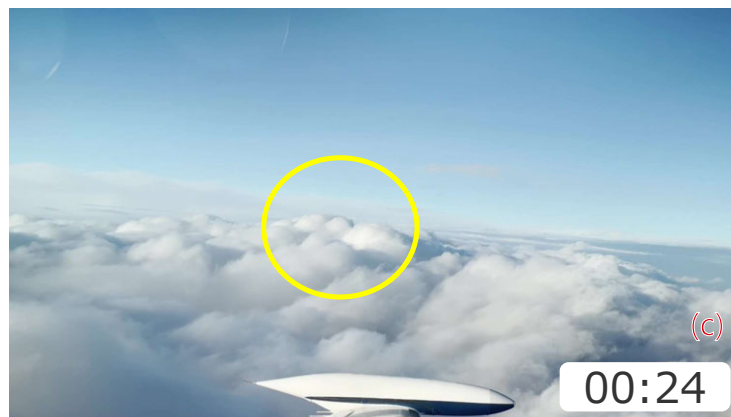
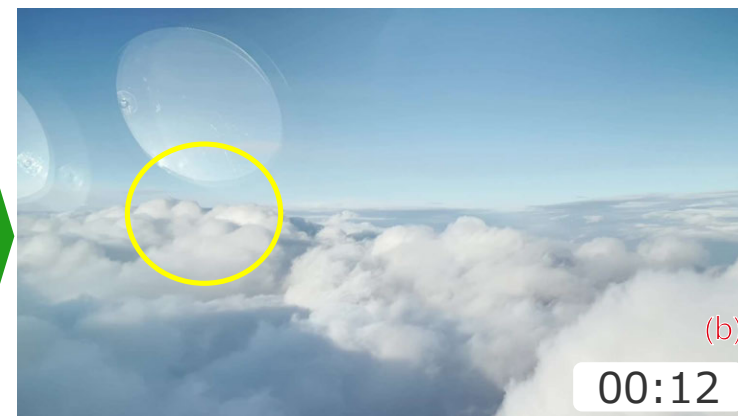
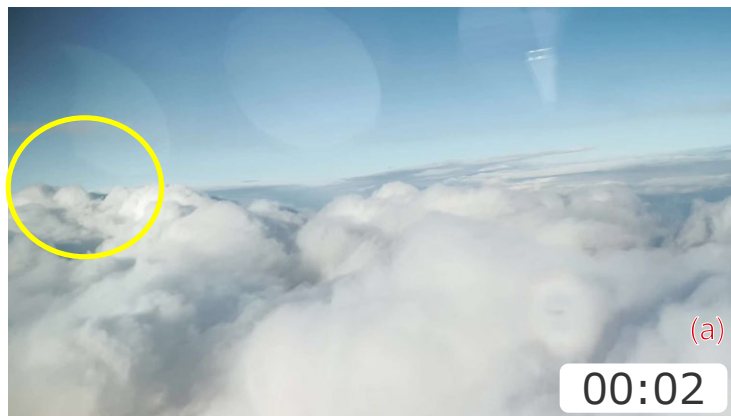
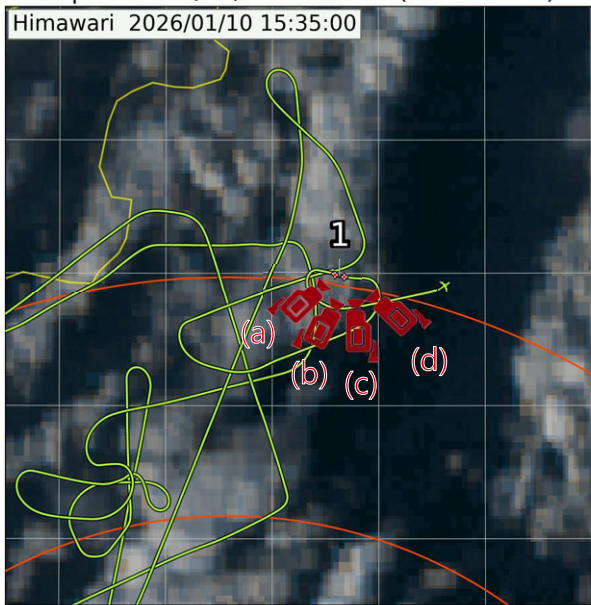


静止画像 と 航空機映像: Exp2 シーディング実施

静止画

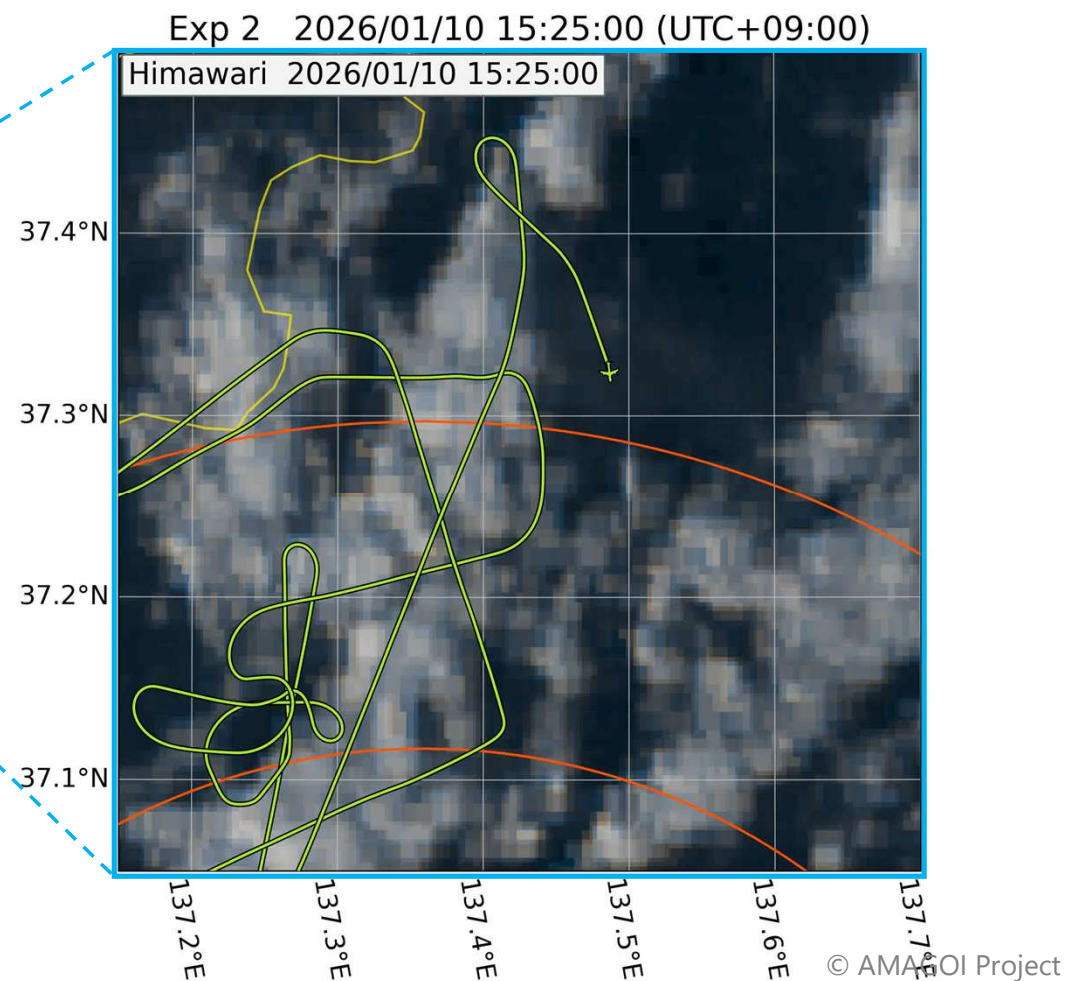
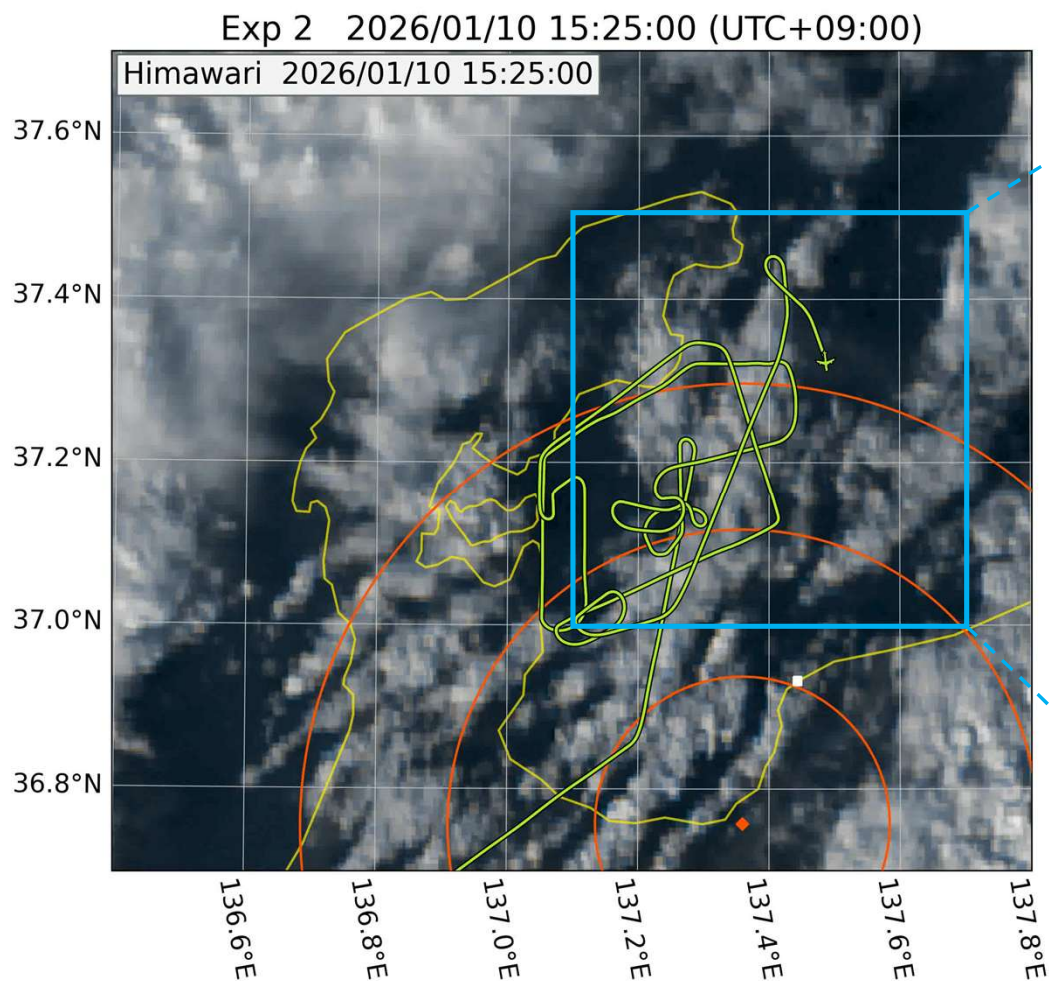
シーディング後(Exp2-1)の雲の目視による確認

Exp 2 2026/01/10 15:36:50 (UTC+09:00)



シーディング(Exp2)実施前 → 後の静止衛星の変化

狙った雲に散布は成功しているが、静止衛星では効果は不透明



実験状況と報告

4. まとめ

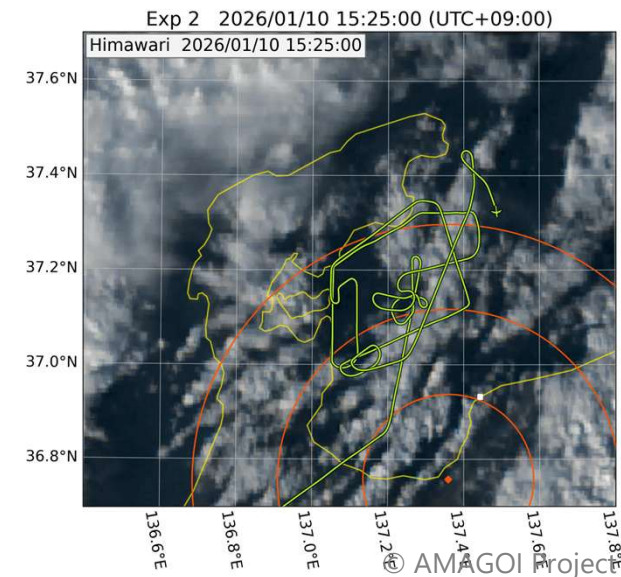
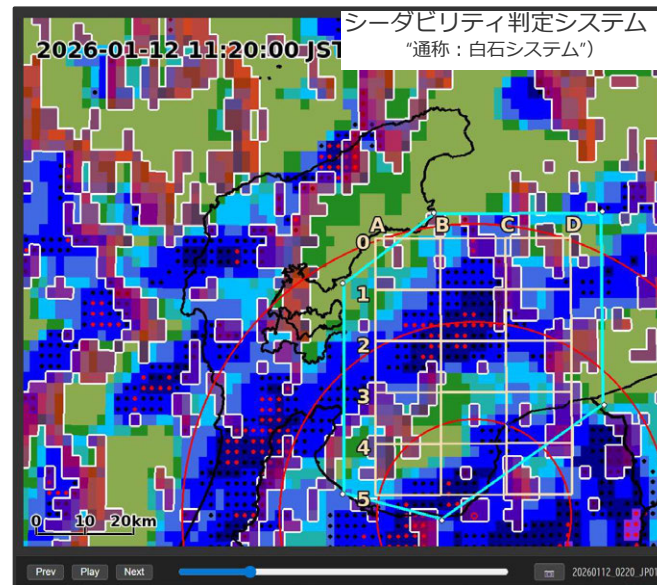
狙いを定める難しさ

- 「ひまわり」観測は2分30秒ごとだが、画像が手元に届くのは5~10分後
 - 飛行機から見える雲は限定的
 - 飛行機の現在地が分からない
- 5~10分前の画像をもとに、5~10分後に
- シーディングに適しており、かつ
 - 飛行機がそこに飛んでいける



雲を予測

- 今回は（何とか）うまく行ったが、少なくとも「今の雲の様子」を知る・予測するシステムは必須
- 数値予報は間に合わない
→ AIの活用？



小槻プロジェクトとして**初の屋外実験**、日本のプロジェクトでも15年ぶりの人工降雪実験
来年以降の本格実験に向けた**予備実験として成功**
リアルタイムシーダビリティ判定手法やプロジェクト内外連携など**期待以上の進展あり**

- **プロジェクトとして初の屋外実験**
 - 安全面に最大限配慮して実施
- **予備実験の成功** → 大きな問題なく、かつ、大きな想定外なく実験実施・終了
 - 実験準備
 - 観測地点の確立、実験審査、実験判断の言語化・フォーマット化
 - 市民説明会の実施によるELSIの十分な考慮
 - 実験中のロジスティクス
 - 行政連携
 - プロジェクト間連携
- **期待以上の進展**
 - 地上班による気象等の現況把握・シーディング候補地点の指示における想定以上の成果
 - ひまわり・レーダによるリアルタイムシーダビリティ判定手法
 - 限定的な気象改変の可能性 → 現地観測・リモートセンシング観測などによる詳細解析が必要

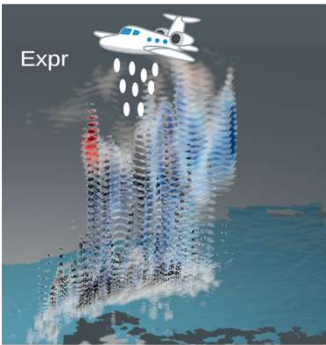
- **10年目目標：小規模な降水システムに対する気象"制御"**
- **航空機**
 - 地上班とのリアルタイム状況共有
 - ドライアイス以外の手段 (液体炭酸ガス、ヨウ化銀、生物由来物質の活用)
 - **ドローンの活用可能性**
- **気象改変効果の測定 / 理解**
 - レーダ・衛星などのリモートセンシングデータの解析
 - 航空機・地上への密な360度カメラ設置
 - **通常シーディング (≒人工降雨) とオーバーシーディングの分かれ目**
- **実施地域**
 - 海上実施を地上から観測する難しさ → **陸上も含めた実施地域の検討可能性**
- **気象・シーダビリティ予測手段**
 - 精緻な微物理過程を取り入れた数値計算
 - **AI雲ナウキャスト・シーダビリティ判定** ← 「今の」雲の様子
 - 雷予測

今後の方向性・富山でおこす共創

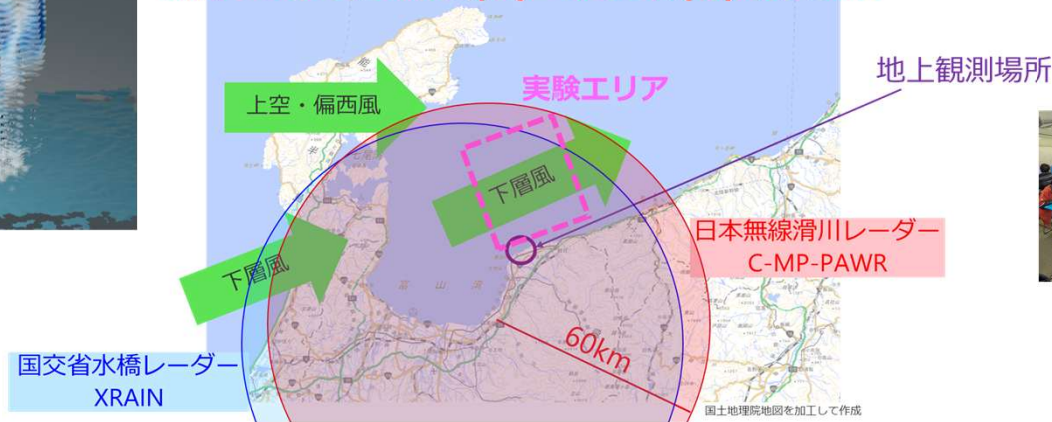
富山大学 教授
地球システム科学科

安永 数明 氏

予備実験から分かったこと



期間：2026年1月6日(火)～1月14日(水)のうち4日



- ① 航空機：機動性や経済性の重要性
- ② 気象改変効果の測定 / 理解：レーダやカメラなど密な観測網の必要性
- ③ 富山の地形・自然環境：富山のユニークな自然が新しい武器となる未来

① 航空機：科学的・経済的に合理的な選択

なぜ、夏ではなくて、冬の積乱雲を対象とするのか

→夏季の積乱雲に似た性質を持ちながら、予測をしやすい日本海の雪雲を対象として小規模なドライアイス散布を行い、雲の振る舞いや効率的な散布方法に関する知見を得る

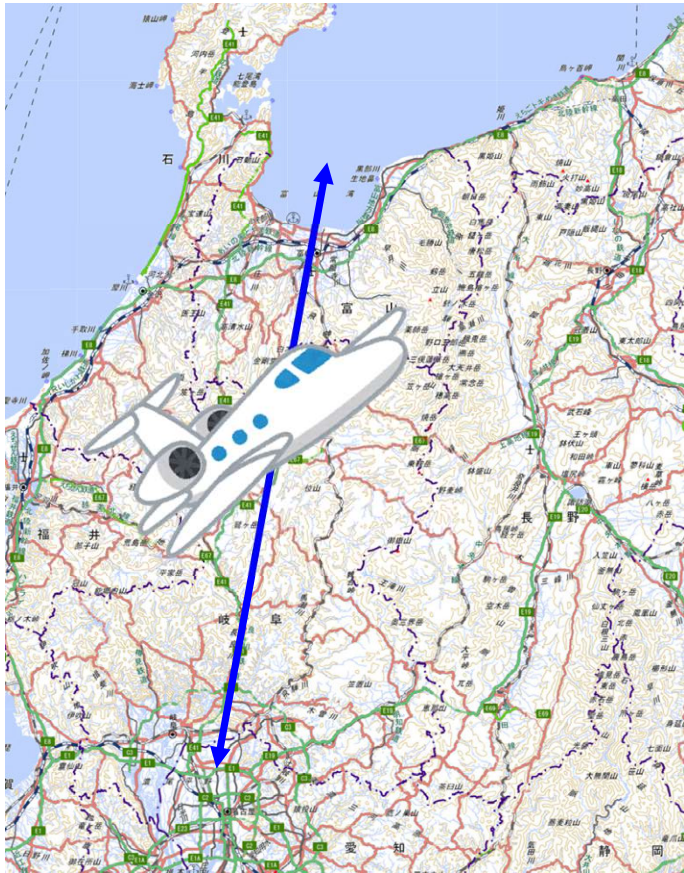
	夏季	冬季 雪雲
類似性	—	高い
高度	高い ジェット機が必要 高額	低い プロペラ機で間に合う それほど高額ではない
ターゲットの積乱雲	発生予測が難しい	発生予測が比較的易しい
発生頻度	稀	頻繁に発生
観測しやすさ	しにくい	しやすい

- 今回の実験で使用したKing Air 200Tは、相対的には安価。
- 離着陸は名古屋



① 航空機：機動性や経済性の重要性

搭乗開始から領域到着まで1~1.5時間程度必要 → 雲の発達状況が変わる



出典：国土地理院地図

概要: 2026/01/10 海上実験 (Exp2)

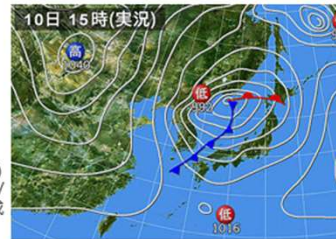
ロール状対流で成長中の雲を選定し計8kgのドライアイスを散布

天気概況

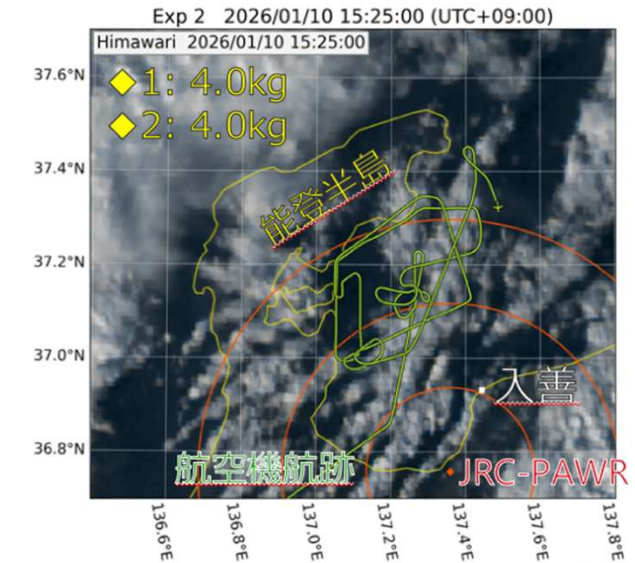
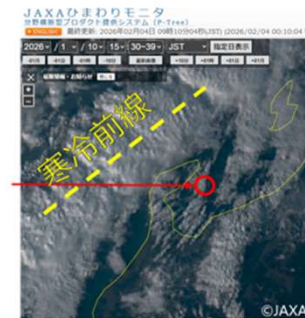
シーディングの実施状況 (補正RGB画像)

寒冷前線の
前面で実施

出典：tenki.jp
実況天気図(2026年1月10日)
<https://tenki.jp/past/2026/01/10/chart/>を加工して作成
(無断転載禁止)



機内から目視
で対象の雲を
選定



© AMAGOI Project

10年後の実証までには、機動性や経済性に関する問題解決が必要

①航空機：ドローンの活用の可能性

垂直離着陸（VTOL）ドローンの利用が、解決策の1つ？

Skyways V2.6の主要スペック

- 積載量（ペイロード）：約 5.69 kg
- 航続距離（レンジ）：535.6 km

Skyways V3 B2の主要スペック

- 積載量（ペイロード）：100 lb（約45.4 kg）
- 航続距離（レンジ）：1000+ miles（約1609+ km）

②気象改変効果の測定 / 理解 : 密な観測網の必要性

実証実験で自然界に加えるエネルギーの概算

項目	条件	熱量 (J)
降水 10mm	富山湾面積:2,400 km ²	6.792×10^{16}
降水 1mm	富山湾面積:2,400 km ²	6.792×10^{15}
モンスーンの運動エネルギー	富山湾面積:2,400 km ² 風速:20m/s 気圧差:1000 – 600 hPa	1.96×10^{15}
炭酸ガス 60kg	昇華熱 (L_{CO_2}): 約573 (kJ/kg)	3.438×10^7
炭酸ガス 20kg	昇華熱 (L_{CO_2}): 約573 (kJ/kg)	1.146×10^7

*原子力発電所が1日に発電する電力量は、約 8.64×10^{13} J

実験で加えるエネルギーは、自然界の100万分の1以下

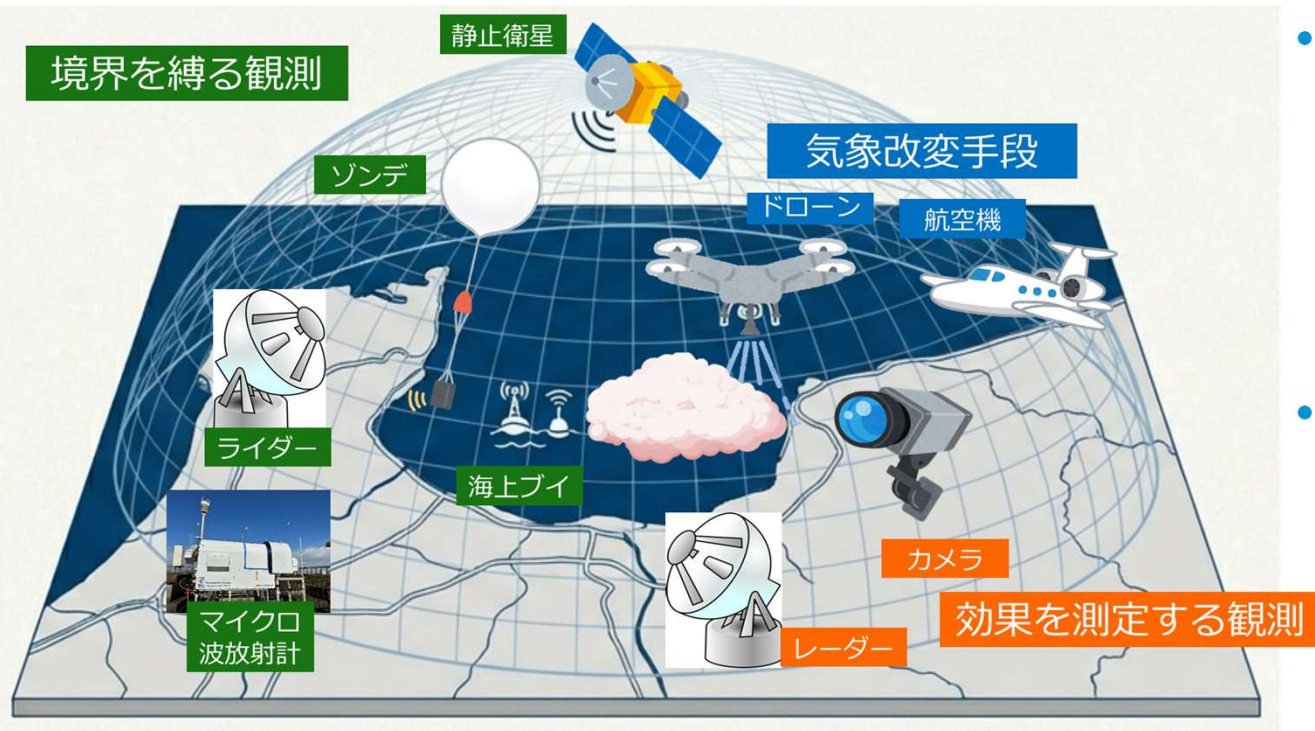
→効果の測定は、密に高精度に行う必要がある



② 気象改変効果の測定 / 理解 : データシールド構想

① 境界条件を観測可能、② 改変効果が海上に抜けていく という富山湾の地形を活かし
富山湾でデジタルツイン開発し。詳細な気象状況を把握しながら実験を進める計画。

富山湾デジタルツインの概念図



- **気象・海象のリアルタイムの可視化**

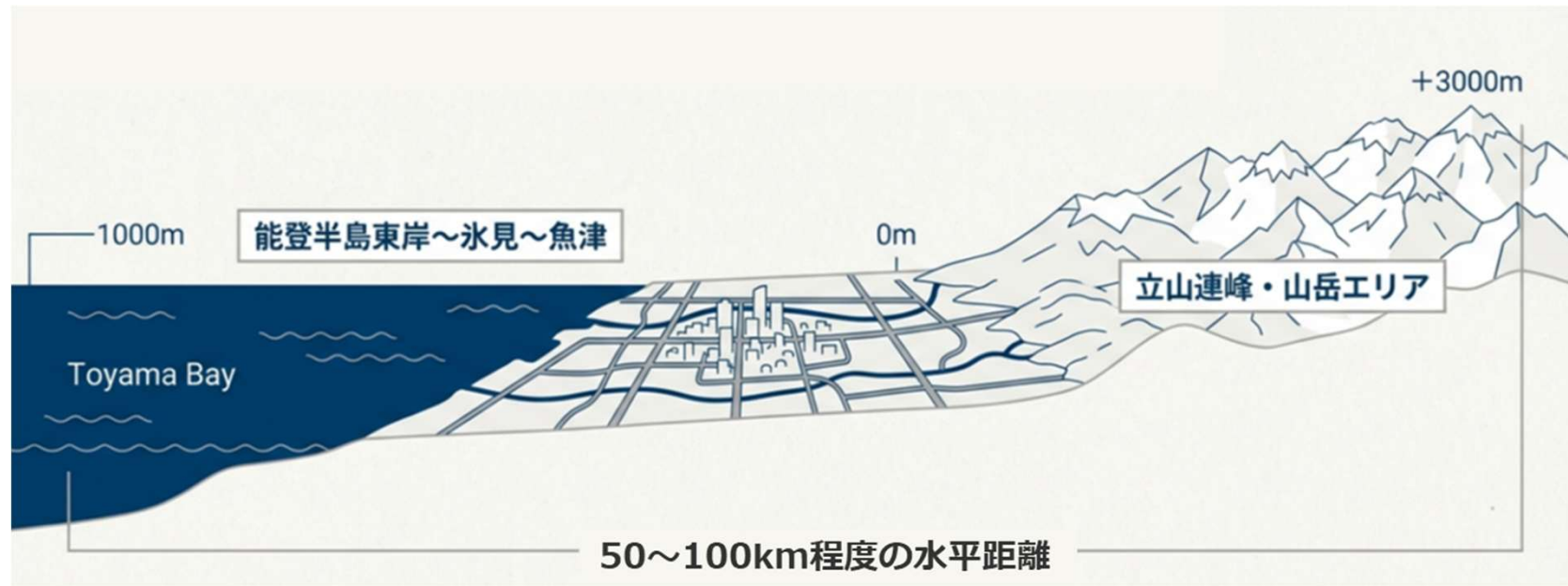
- 「今」の雲の様子を把握 : AI雲ナウキャスト・シーダビリティ判定

- **気象介入効果の定量化**

- (微小な) 「効果」の測定 : 多様な観測測機を数値モデルに取り込むことで、介入の効果を定量的に評価

③富山の地形・自然環境：富山の自然環境の特異性

- 植生の観点からの座標変換（標高100-150 m=緯度1°の変化）
 - 垂直方向：標高が100m上がると、気温は約0.6°C低下
 - 水平方向：緯度が1°北へ進むと、気温はおよそ0.5°C~1.0°C低下



緯度30度分の気候変化が高低差3,000mに凝縮！

これを、気候変動適応や新産業創出の自然ラボとして強みにできないか？
(Toyama Natural Laboratory)

③富山の地形・自然環境：世界のNatural Lab.

- ノルウェー/スヴァールバルの地球観測システムの統合プラットフォーム

スヴァールバルの観測・研究インフラ（SIOSの枠組み）を背景に、**極低温・強風・着氷・極夜・通信制約などの極域特有の条件下**で、ドローンや自律観測プラットフォームの運用・性能検証につながる実証の場として。



- Nevada (ネバダ：ドローン・自律システム特区)
NIAS (Nevada Institute for Autonomous Systems)

Nevada Autonomousは、**自然・広域環境を使った Autonomy/UASの“実運用試験インフラ”**として、ロボティクス/AI/自律システムの開発・試験・展開を支援し、FAA指定のネバダUASテストサイト運用を州全体で担う。



<https://www.unr.edu/ncar/programs/nevada-autonomous>

Toyama Natural Laboratory

富山 高低差4,000mラボ

世界基準の「防災・レジリエンス」を生み出す、天然の実証フィールド



厳しい自然を社会レジリエンス向上の実験場へ！！

富山でおきている共創

株式会社たがやす

鈴木 耕平 氏

神通川における流域治水への取り組みと地域づくり



「流域」のこと
みなさんに知ってほしい

株式会社たがや
（一社）流域ふらっとフォーム
鈴木耕平さん

環境デザインの
軸として
地域のことを考えてみる

はじめに…
概略をつかむって
大事

富山 100万人
ガボン くらい
のサイズで
250万人

規模が違っていると
考えること 取り組むこと
が変わる

流域とは？
降った雨が川に集まる
その範囲のこと

流域の
上流
田んぼ
ダム
遊水池

立場が違えば
色んな利害が異なる

運動会
近いか？困りませんか？

下流
グラウンドに
雨水貯めたら？

事実・予測
データを軸に
話しましょう

神通川の流域人口
38万人
同じ流域の中で
食産業 工業
めぐみ 私たちは
生活している

現代は
気候変動
大雨のとき

河川工事
だけではもう厳しい

流域に住む人々が
一緒に対策を考える

流域治水

みなさん
集まって話しませんか？

気象、川、田の
研究者から
呼びかけ

流域ふらっとフォーム

あらゆる関係者とともに
流域の暮らしを豊かにする地域づくり

- 氾濫をできるだけ防ぐ
減らすための対策
- 被害対象を減少
させるための対策
- 被害の軽減早期
復旧・復興のための対策

みんなが地域づくりに
主体的に関わる必要がある



話し合うためには...



模範流域治水
協議会

宮崎 ハブは中学生!!

中学生が大人の前で
意見交換



福島
阿武隈川流域

30以上の
自治体

上流
遊水池化

下流



農業にきた場所
下流の安全のために
手放します...!

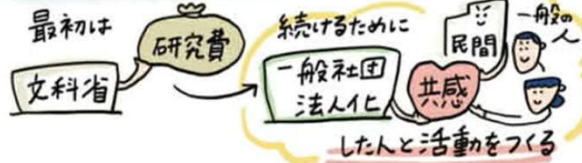
流域内で
知ってもらおう活動!

愛知 市をまたぐ
用水路の管理

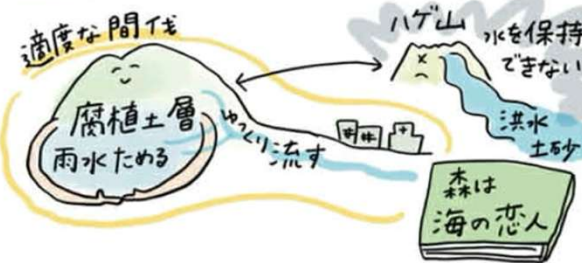


現状を
知り合う
一緒に
考えていく

Q. 流ぶらの取り組みの資金はどこから?



Q. 森林と流域治水の関係は?



Q. 流域治水で宅地に関わることは?



展望

全国の
地方大学
地域の
流域
結びつく
ように!

早くから話し合いに
関わることで
正策
だけじゃ決断前

流域の暮らし
の中で
守りたいことを
守れるように



質疑応答と意見交換

閉会のご挨拶
